

## 竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介

—— 和歌を主題とする組香（一） ——

本稿は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介（『社会科学』第46巻第2号、二〇一六年八月）を受け、竹幽文庫蔵『香道籬之菊』所載の組香について、とくに和歌を主題とする組香を対象に、翻刻と考察をおこなうものである。

本書は、礼・楽・射・御・書・数の六巻六冊から成り、楽から数の巻に一七七の組香が掲載されているが、その半数近くは、和歌および歌集の序文など、特定の和歌作品を素材として組み立てられている。そこで、本稿では、楽の巻から、桜香・二哥香・残月香・蟬丸香・八重垣香・長月香・待宵香・雲井香の八つの組香を取り上げる。なお、資料に関わる基本的な説明は、前稿を参照されたい。

### 凡例

- 一、冒頭に、巻名と組香の通し番号、組香名を示す。
- 一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、以下の方針によって校訂する。

- 1、漢字・仮名ともに通行の字体を用いる。

矢野環  
福田智子

- 2、仮名遣い・反復記号・送り仮名は、底本のままとする。
  - 3、濁点は、底本に記載されているもののみ記す。
  - 4、適宜、句読点を施す。
  - 5、朱書きは、「朱」と示す。
  - 6、一面の終わりには「」を付し、さらに巻名と丁数を記す。
- 一、考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）和歌作品との関わり、というふたつの観点を設ける。（1）では、御家流宗家三条西公正氏により考案された構造式（香の複雑な組み合わせを表記した数式。詳しくは、矢野環・岩坪健・福田智子「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」（『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一月）を参照されたい。）を記した上で、その手順を説明する。また、（2）で引用する和歌作品の本文は、特

に断らない限り『新編国歌大観 CD-ROM版』Ver.2 (角川書店、二〇〇三年) に拠る。なお、解説を要する香道用語には「\*」を付し、「香道用語解説」として、本稿の末尾に一括して五十音順に列挙する。

一、巻末には影印を付す。綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したものに丁数を付して示す。

《楽巻一》 桜香

【翻刻】

△(朱) 桜香

紀貫之

桜散る木の下風はさむからで空にしられぬ雪ぞ降ける  
此和哥の心をうつし侍る。

一 名乗紙にて聞べし。

一 桜の香二包、雪の香二包、風の香一包、都合五包聞香とす。

一 樂四ウ 桜の香、外に拵へ試に出す。

一 本香五炷皆聞終りて後に名乗紙に認出すべし。

一 記録は、桜の香、雪の香、各一点充、風の香、二点たるべし。桜二炷と雪一炷聞たる人、又、桜一炷と雪二炷聞あらは、聞数同しといへとも、桜二炷雪一炷聞の方、勝にて記

録を取べし。若又、桜二炷聞たる人と雪二炷聞たる方は、雪二炷聞たる人勝也。認様左のごとし。」樂五オ

桜香記

〔表〕樂五ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

桜	2コ	}	5
雪	2		
風	1		

\* 本香には、「桜」「雪」の香、各二包と、「風」の香一包の計五包を用いる。\* 試香は「桜」の香のみ。五炷すべてを聞き終わつた後、\* 名乗紙に答えを書く。

記録点は、「桜」「雪」の香を聞き当てれば各一点、「風」の香は二点である。ただし、たとえば同じ三炷を聞き当てたとしても、「桜」二炷と「雪」一炷の方が、「桜」一炷と「雪」二炷よりも勝とする。また、「桜」二炷と「雪」二炷ならば、後者が勝つ。聞き当てた香に、「桜」と「雪」とが混在している場合には「桜」の聞き数を、また、「桜」のみ、「雪」のみならば、「雪」を重視する。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭に掲げられている歌は、『拾遺集』巻第一春、六四番に載る。

亭子院歌合に

(つらゆき)

さくらちるこのした風はさむからでそらにしられぬゆきぞ  
ふりける

香の名称として用いられている「桜」「雪」「風」という語を組み合わせた歌は、他にも、「雪とのみふるだにあるをさくら花いかにちれとか風の吹くらむ」(古今集・春下・八六・凡河内みつね・さくらのちるをよめる)をはじめとする例がある。だが、この貫之歌は、『袋草紙』や『古来風体抄』といった歌論書にも多く取り上げられ、近世には、「そらにしられぬゆき」という表現が、松の葉や浄瑠璃にも引かれるなど、人口に膾炙した歌であった。本組香にも、この貫之歌の作品ジャンルを超えた享受の一端が窺えよう。

《楽巻一三》二哥香

【翻刻】

△(朱) 二哥香

フタウタ

古今和歌集の序に、なには津の哥はみかとのおほんはしめ也。あさか山の言葉は、うねめのたわむれよりよみて、このふた哥は、哥の父母のよふにそてならふ人のはしめにもしけるといへり。組香もまた香をさく人の手習ふ初ともいふべければ、今組香となし侍る。」楽六オ

一 名乗紙に認出べし。

一 難波津の香二包、浅香山の香二包、客香一包、都合五包打交て、其内二包取て炷出し、残三包は不用。

一 地香、試に出す。客香、試なし。

一 記録は、独聞二点、二人よりは一点充、客の交たるは独聞三点、二人よりは二点充たるべし。

名乗紙認様

難波津く<sup>〱</sup>と出るは 難波津と記。」楽六ウ

浅香山く<sup>〱</sup>と出るは 浅香山と記。

浅香山難波津と出るは 手習初と記。

難波津浅香山と出るは 哥の父母と記。

客 難波津と出るは そへ哥と記。

難波津 客と出るは 冬こもりと記。

客 浅香山と出るは 山の井と記。

浅香山 客と出るは うねめと記。

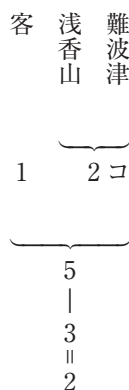
記録、左のことく認る也。」楽七オ

## 二哥哥香之記

〔表〕 兼セウ

## 【考察】

## (一) 竹幽本組香の方法



\* 本香は、「難波津」「浅香山」の香、各二包と、客香一包の計五包を交ぜ、このうち二包を炷く。残り三包は用いない。試香は、地香の「難波津」「浅香山」の香に行い、客香にはない。答えは名乗紙に書く。

\* 記録点は、独り聞きが二点、二人からは一点である。なお、本香二炷のうち客香が交じっている場合は、独り聞き三点、二人からは二点とする。

## (二) 和歌作品との関わり

冒頭に明記されるように、『古今和歌集』仮名序に拠った組香である。いま、あらためて該当部分の本文を挙げてみよう。

なにはづのうたはみかどのおほむはじめなり おほささきのみ

かどのなにはづにてみこときこえける時、東宮をたがひにゆづりてくらゐにつきたまはで三とせになりければ、王仁といふ人のいぶかり思ひてよみてたてまつりけるうたなり、この花は梅のはなをいふなるべし、あさか山のことばはうねめのたはぶれよりよみて かづらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりけるに、くにつかさ事おろそかなりとてまうけなどしたりけれどすさまじかりければ、うねめなりける女のかはらけとりてよめるなり、これにぞおほきみの心とけにける、

あさか山かけさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものは

このふたうたはうたのちちははのやうにてぞ手ならふ人のはじめにもしける

そもそもうたのさまむつなり、からのうたにもかくぞあるべき、そのむくさのひとつにはそへうた、おほささきのみかどをそへたてまつれるうた

なにはづにさくやこの花ふゆごもりいまははるべとさくやこのはな

といへるなるべし(傍線筆者。以下同じ。)

傍線部分「なにはづ」「あさか山」「うねめ」「山の井」「うたのちちはは」「そへうた」「ふゆごもり」は本文そのままを聞きの名目に、また、「手習初」は、「手ならふ人のはじめ」を、名目にふさわしく言い換えたものである。

## 《楽卷一五》残月香

【翻刻】

△(朱)残月香

後徳大寺左大臣

時鳥鳴つる方を詠れば唯有明の月ぞ残れる

此和哥の心をもて組めり。

一 試なし。

一 名乗紙にて聞べし。

一 時鳥香二包、夜の香五包別香也、各試なし。都合七包楽九ウ打

交焼出すに、時鳥香、同香成る事を聞當るべし。出香、皆

炷終て後に、香包紙を開く也。

一 名乗紙に、初に出たる時鳥香を時鳥と認め、後に出る時鳥

香を月と認め、出すべし。記録にも此通認る也。

一 記録点は、夜の香、独聞の差別なく一点充也。

○(朱)時鳥聞 月聞 独聞、各四点也。楽

一〇オ

○(朱)時鳥 不聞 月聞 各点なし。

○(朱)時鳥聞 月 不聞

○(朱)時鳥を月と聞違、星三つ、独違、四つ。

○(朱)月を時鳥と聞違、星なし。

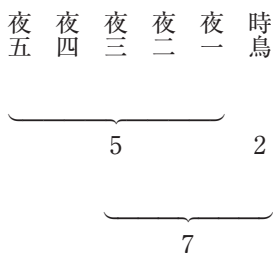
認様左のごとし。楽一〇ウ

## 残月香之記

【表】楽二オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、「時鳥」の香二包と、「夜」の香を別香別香で五包の計七包を用いる。\* 名乗紙には、「時鳥」の香二炷別香のうち、始めに出た香には「時鳥」、後に出た香には「月」と記す。記録も同様である。

記録点は、「夜」の香については、何人聞き当てても一点とする。「時鳥」の香は、二炷ともに聞き当て、かつ、独り聞きの場合、各四点である。また、一炷目(時鳥)を聞き違えると、二炷目(月)を聞き当てても、各々点はない。逆に、一炷目(時鳥)を聞き当て、二炷目(月)を聞き違えると、一炷目の二点が得られる。なお、一炷目(時鳥)を二炷目(月)と聞き違え

と星三つ、独りのみ聞き違えたときは、星四つを付すが、二炷目（月）を一炷目（時鳥）と聞き違えても、星は付けない。

(2) 和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『百人一首』八一番に載る藤原実定（一一三九〜一一九一）の詠である。

後徳大寺左大臣

ほととぎす鳴きつるかたをながむればただありあけの月ぞ  
のこれる

本組香では、「時鳥」「夜」「月」という三つの名目が用いられている。時鳥の鳴き声を耳にして、ふとその方を見遣ると、時鳥の姿ではなく、代わりに月がまだ空に残っているだけだったという実定詠の、聴覚から視覚への場面転換に即して、「時鳥」の香二炷のうち、初めを「時鳥」、後を「月」としたのである。 「月」を聞き当ても「時鳥」を聞き違えると両方の得点がなく、また、「時鳥」を「月」と聞き違えると星が付くのは、歌の内容に即して、「月」を見るよりも、「時鳥」の「声／香」を「聞く」ことを重視したためと考えられる。また、「夜」の香を別香で五包用いるのは、時鳥を紛れさせるといふ寓意であろうか。「時

鳥」の香を聞き当てたときの得点は、「夜」の香よりも高く設定されている。

《楽巻一六》蟬丸香

【翻刻】

△（朱）蟬丸香

- 一 名乗紙たるべし。
- 一 これやこの、香、行もかへるもの香、別れてはの香、知るもしらぬもの香、各二包、逢坂の関の香一包（客）、都合九包打交、一炷充炷出し、九包終りて後に包紙を開くべし。
- 一 地香、外に拵へ試に出す。客香試なし。」（樂二ウ）
- 一 記録は、同香二炷ながら聞たるを記す。一炷斗聞たるは不記。客香は一炷故に記録すべし。独聞の差別なく二点充也。皆中を一首と認るべし。
- 一 本には左の如く認るべし。

是此 行帰 別逢 知知 関  
これやこの ゆくも帰るも わかれては しるもしらぬも 客（朱）

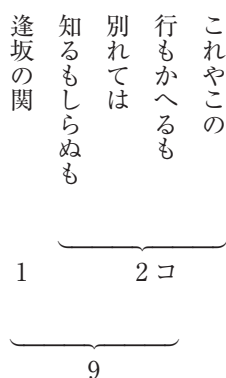
如此、同香を二名に分て認るべし。左のごとし。」（樂二オ）

蟬丸香之記

〔表〕（樂二ウ）

## 【考察】

## (1) 竹幽本組香の方法



本香には、地香「これやこの」「行もかへるも」「別れては」「知るもしらぬも」の香、各二包と、客香「逢坂の関」の香一包的計九包を用い、一炷ずつ炷く。地香は、本香の前に試香を行う。客香には試香はない。九炷すべてを聞き終わった後、名乗紙に答えを書き、提出後に包紙を開いて正答を披露する。

記録点には、地香の場合、同香二炷をもに聞き当てる記録に記されるが、一炷のみだと記載されない。一方、客香は、一炷のみなので、それを聞き当てればもちろん記録に記し、独り聞きの違いなく、何人聞き当てても二点とする。皆の場合は、記録表の最下段に「一首」と記す。なお、表の一行目には正答を記すが、「これやこの」の香は「是」「此」、「行もかへるも」の香は「行」「帰」、「別れては」の香は「別」「逢」、「知るもしらぬも」の香は「知」「知」とし、同香を二つの名に分けて記載する。「逢坂の関」の香は「関」と記す。

## (2) 和歌作品との関わり

本組香が依拠している歌は、『百人一首』一〇番に載る。

蟬丸

これやこの行くもかへるも別れてはしるもしらぬもあふさかの関

この歌は、「これやこの」「行くもかへるも」「しるもしらぬも」というように、一句の中で、語の対を構成している。本組香では、さらに腰句「別れては」に、結句「あふさかの関」の掛詞「逢ふ」を組み合わせて対にすることで、初句から第四句までの各句を漢字二文字で表し、同香二包を充てるという趣向を生み出している。

## 《楽巻一八》八重垣香

## 【翻刻】

△(朱) 八重垣香

素盞鳴尊すまののみにと

夜ク茂多菟伊都毛夜覇餓岐菟磨語昧爾夜覇餓積菟俱盧  
 ノノヤエガキヲ  
 贈迺夜覇餓岐廻

此御詠歌を和歌三十一文字の始とせり。其假名を分けて組香となし侍る。

一 名乗紙にて聞くべし。」樂一四ウ

一 八雲立の香一包、妻こめにの香一包各同香、出雲やゑがきの香

一包、八重垣つくるの香一包各同香、其八重垣をの香一包客香、都合五包聞香とす。

一 八雲立の香斗、外に拵へ試に出す。其餘の香、皆試なし。

一 聞香の香包、左のことし。

八雲立の香

金紙の香包を用」樂一五オ

出雲やゑがきの香

妻こめにの香

八重垣つくるの香 銀紙の香包を用

其八重垣をの香

右の通、香を包て、都合五包、能く打交置て、金銀金銀

銀と一炷充取て炷出すべし。

一 五炷焚終りて後に、名乗紙に認出すべし。認様左のごとし。

有試同香

金包八雲立 一番 三番(朱)

銀包妻こめに 二番 四番 五番(朱)」樂一五ウ

無試同香

金包出雲やゑがき 一番 三番(朱)

銀包八重垣つくる 二番 四番 五番(朱)

無試一炷 銀包其八重垣を 二番 四番 五番(朱)

一 記録は、客香(「独聞」脱カ) 三点、二人より二点、地香、

独聞二点、二人より一点充也。不中は皆星一つ充附る。客

香不中は星二つ充也。皆中は和歌始と記すべし。

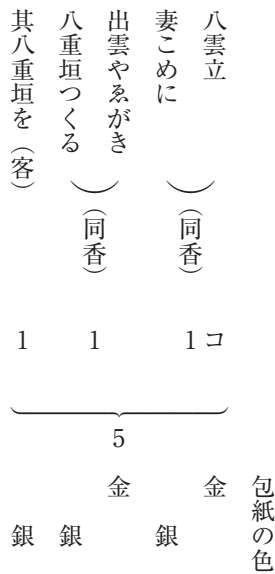
一 記録の界は、豎斗にて、横界なし。左のことし。」樂一六オ

八重垣香記

〔表〕樂一六ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、「八雲立」「妻こめに」の同香二包と、「出雲やゑがき」「八重垣つくる」の同香二包の地香と、「其八重垣を」の客香一包の計五包を用意する。試香は「八雲立」「妻こめに」の香のみ。その他の香には試香はない。

\* 香包には金紙と銀紙を用いる。すなわち、「八雲立」「出雲やゑがき」の香は金紙、「妻こめに」「八重垣つくる」「其八重垣



を」の香は銀紙である。これらの香を交ぜ、金・銀・金・銀・銀という順に、一炷<sup>\*</sup>ずつ炷く。

従って、「有試同香」（試香のある同香）の「八雲立」の香と、「無試同香」（試香のない同香）の「出雲やゑがき」の香は、金包なので、一炷目か三炷目に出ることになる。また、「有試同香」の「妻ごめに」の香と、「無試同香」の「八重垣つくる」の香、そして、「無試一炷」（試香のない一炷のみの香）の「其八重垣を」の香は、いずれも銀包なので、二炷目・四炷目・五炷目のいずれかに出る。五炷<sup>\*</sup>すべてを聞き終わった後、名乗紙に答えを書く。

記録は、「客香三点」とあるが、「独聞」の脱字であろう。とすると、客香の独り聞きは三点、二人からは二点を付すということになる。また、地香は、独り聞き二点、二人からは一点である。地香を聞き違えた場合は星<sup>\*</sup>を一つ、客香では二つを付す。皆<sup>\*</sup>ならば、記録の最下段に「和歌始」と記す。

なお、記録表には、縦罫線のみで、横罫線はない。

(2) 和歌作品との関わり

前掲の二哥香（楽巻一三）と同じく、本組香は、『古今和歌集』仮名序に見える歌に拠った組香である。

ちはやぶる神世にはうたのもしもさだまらずすなほにして  
 事の心わきがたかりけらし、ひとの世となりてすさのをの  
 みことよりぞみそもじあまりひともしはよみけるすさのを  
 のみことはあまてるおほむ神のこのかみなり、女とすみたまはむとていづも  
 のくにに宮づくりしたまふ時にその所にやいろのくものたつを見てよみたま  
 へるなり

やくもたついづもやへがきつまごめにやへがきつくるそのやへがきを  
 この歌は、七音句（第二・四・結句）すべてに「八重垣」の語を含み、同じ語を繰り返して用いることによりリズムを作り出している。この歌を、五・七・五・七・七の句で切り、五包の香の名称としているが、七音句の第二・四句の香を同香にするという発想は、同語反復を用いたこの歌の構造に触発されるところでもあったであろう。また、包紙の色分けについて、形式的に上句（初・第二・腰句）と下句（第四・結句）に分けるのではなく、金紙を用いる第二句までと、銀紙の第三句以降に分けるのも、歌意を考慮した判断か。なお、出香<sup>\*</sup>の順序は、金・銀・金・銀・銀なので、答えが五・七・五・七・七になるとは限らず、また、元の歌の句の順序に並ぶことはない。

《楽巻一九》長月香

【翻刻】

△(朱)長月香

後水尾院御製

又たくひ半の秋の空よりも柁木のかづら長月の月

一 名乗紙を用ゆべし。

一 またたくひの香、半の秋の香、空よりももの香、柁木のかづらの香各一包、長月香二包客ウ香、月一包ウ香、都合七包聞香とし、皆炷終て後に香包紙を」樂二七オ開く也。

一 地香、外に拵へ試に出す。客ウ香試なし。

一 初に出る長月の香は聞捨也。記録にも録せず。試にする心也。名乗紙にも後に出たる長月斗を書出すべし。

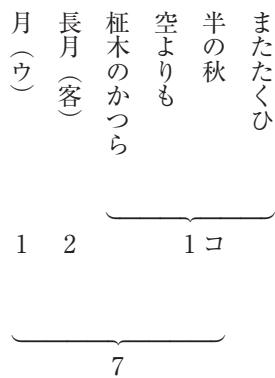
一 記録点は、月の独聞三点、二人より二点充也。其外は独聞の差別なく皆一点充也記録横。別なし。 認様左に記す。」樂二七ウ

長月香之記

〔表〕樂一八オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、地香「またたくひ」「半の秋」「空よりも」「柁木のかづら」の香、各一包と、客香「長月」香二包、ウ香「月」香一包の計七包を用いる。\* 試香は四種類の地香のみで、客香・ウ香にはない。七炷すべてを聞き終わってから、名乗紙に答えを書く。

客香「長月」香二包のうち、初めに出た香は聞き捨てにし、記録にも残さない。いわば、「長月」香の試香の役目を負う。名乗紙に書く答えにも、後に出た「長月」香のみを記す。

記録点としては、「月」の香の独り聞きは三点、二人以上聞き当てた場合は二点とする。その他の香は、何人聞き当てても一律に一点ずつ付す。なお、記録表には、横罫線はない。

(2) 和歌作品との関わり

本組香冒頭に挙げられている歌は、『新明題和歌集』巻第三秋、二一九一番に載る。いま、当該歌が配された「十三夜月」題の歌群全体を挙げてみよう。

十三夜月

仙洞(靈元院)

秋風にみがきそへてよ玉くしげふたび月のなにしおふ影

(二一九九)

みし秋の最中よりけにおく霜も白きを後の月のさやけさ

(二一九〇)

又たくひなかばの秋の光にも正木のかづら長月のかげ

(二一九一)

後水尾院

光ある今宵の月の言のはにくもる恨も忘れてやみん

(二一九二)

基熙

あかざりし最中の秋のなごりをや猶長月のこよひみすらん

(二一九三)

道晃

雲の上やあふげばたかき名もこよひ空にくもらぬ長月の影

(二一九四)

本文上の問題としては、まず、作者名の異同に気づく。本書で

は「後水尾院御製」と記されるが、『新明題和歌集』では「仙洞」とある。この歌集における「仙洞」は靈元院であり、作者の相違が見られるのである。当該歌が、『新明題和歌集』において、後水尾院の歌(二一九二番)の直前に配されていることから推すと、あるいは、この二一九二番の作者名を見誤ったか。

なお、和歌本文の語句の異同は、第三句「空よりも」―「光にも」、結句「長月の月」―「長月のかげ」が見出される。とくに結句の異同について、本書の書写段階での誤写ではなく、組香成立時から「長月の月」であったことは、「長月」香と並べて「月」香が設けられていることからわかる。

《楽巻一〇》待宵香

【翻刻】

△(朱)待宵香

小侍従

待宵に更行鐘の声聞けはあかぬ別れのとりは物かは

此哥によつて組たる香なり。

一名乗紙たるべし。

一 更行鐘の香、別れの鶏の香、各三包、待宵の香三包客香、月

の香一包ウ香、都合十包出香とす地香二包外に。拵へ試に出す。」樂一八ウ

一 香皆炷終りて後に、聞の通りを名乗紙に認出すべし。

一 記録点は

待宵の香  
三炷聞 二点充  
一炷聞、二炷聞皆一点充

月の香  
二点充也。もし待宵の香を三炷聞あらば、其人は三点かけるべし。

其外の聞は皆一点充也。

聞の下に左の如く認るべし全季。

鐘(朱) 夢驚 鶏(朱) 寢覚 待(朱) 待宵 月(朱) 眺望

樂一九オ 鐘待(朱) 名所 鐘月(朱) 霜夜 鶏待(朱) 衣をか

へす 鶏月(朱) 端居 待月(朱) 菊 鐘鶏待月(朱) 狭衣

鐘鶏待 鐘待月

( 各(朱) きぬく )

鐘鶏月 鶏待月

一包の香を二炷にても三炷にても聞の数に拘わらず。

皆中(朱) 侍従 皆無(朱) 恨

右の通認る也。鐘鶏斗聞たるは下書なし。認様左のごとし。」

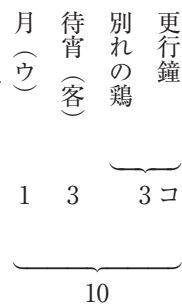
樂一九ウ

待宵香之記

〔表〕 樂二〇オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、地香「更行鐘」「別れの鶏」の香、各三包と、客香「待宵」の香三包、ウ香「月」の香一包の計十包を用いる。\* 試香は二種類の地香のみ。十炷すべてを聞き終わった後、名乗紙に答えを書く。

記録点は、「待宵」の香三炷をすべて聞き当てる各二点で計六点、一炷あるいは二炷では各一点を付す。また、「月」の香を聞き当てる二点であるが、「待宵」の香を三炷すべて聞き当てる場合には、一点を追加し、三点とする。その他の香はすべて、一炷聞き当てるごとに一点である。

記録表の答えの最下段には、聞き当てる香の数に関わらず、その種類によって聞きの名目を記す。すなわち、聞き当てる香が一種類のみの場合、「更行鐘」の香は「夢驚」、「別れの鶏」の香は「寢覚」、「待宵」の香は「待宵」、「月」の香は「眺望」とする。また、二種類の場合は、客香あるいはウ香が一種類以上含まれている場合に名目をしる。具体的には、「更行鐘」「待宵」

の香では「名所」、「更行鐘」「月」の香では「霜夜」、「別れの鶏」「待宵」の香では「衣をかへす」、「別れの鶏」「月」の香では「端居」、「待宵」「月」の香では「菊」である。「更行鐘」「別れの鶏」の香という地香二種類の組み合わせでは、名目は何も記さない。さらに、四種類の香のうち、三種類を聞き当てると、どのような香の組み合わせで聞き当てたとしても、いずれも名目は「きぬく」である。そして、皆ではないが、四種類すべての香を満遍なく聞き当てると「狭衣」、皆では「侍従」、すべて聞き違えたときは「恨」と記す。

(2) 和歌作品との関わり

本組香冒頭に挙げられている歌は、『新古今集』巻第十三恋歌三、一一九一番に載る。

題しらず

小侍従

まつよひのふけ行くかねのこゑきけばあかぬわかれの鳥は  
ものかは

この歌の評判により、作者が「待宵の小侍従」と称されるようになったことは、『平家物語』のエピソードとしても広く知られている。なお、本書では初句を「待宵に」とし、右の『新古今

集』は「まつよひの」であるが、当該歌を載せる『小侍従集』諸本においても、伝本により両方の本文を見出す。

本組香の香の名称は、「月」を除いてすべて当該歌の語句を用いている。「月」にしても、女性が男性の訪れを待つ宵や、後朝の別れの時には、和歌の表現世界を構成するための重要な景物で、当該歌から自然に連想されよう。

さて、本組香には、十三に及ぶ聞きの名目が列挙されている。「待宵」「侍従」も、先の小侍従歌およびその作者に依拠するものであり、また、「恨」も、この詠歌内容を考慮すれば、すべて聞き違えたときの名目としてふさわしかろう。他の名目も、歌に纏わる表現として類例を見出すことができる。以下、その代表的な用例を示す。

① 更行鐘―「夢驚」

『玉葉和歌集』巻第十五雑歌二、一一二九番

(題しらず)

藤原重顕

いくこゑにゆめかおどろく暁のねざめの後のかねぞすくな  
き

② 別れの鶏―「寢覚」

『続古今和歌集』巻第十八雑歌中、一七二三番

(おなじし心「曉」……筆者注。)をよみ侍りける)

大僧正隆弁

うきものとねざめをたれにならひてかあかつきごとにとり  
のなくらん

③月―「眺望」

『拾遺草』(藤原定家) 二二七〇番

月前眺望

さはもなき田のもばかりにしく雲のちりもまがはぬ秋のよ  
の月

④更行鐘・待宵―「名所」

『続拾遺和歌集』巻題八雑秋歌、六四四番

古寺鐘といふことを

心円法師

高野山あか月をまつ鐘のおともいくよの霜にこゑふりぬら  
ん

⑤更行鐘・月―「霜夜」

『風雅和歌集』巻題八冬歌、七八四番

題しらず

後伏見院御歌

鐘のおとにあくるか空とおきてみれば霜夜の月ぞ庭しづか

なる

⑥別れの鶏・待宵―「衣をかへす」

『古今和歌集』巻第十二恋歌二、五五四番

(題しらず)

小野小町

いとせててこひしき時はむば玉のよるの衣を返してぞさる

⑦別れの鶏・月―「端居」

『前撰政治家合』(嘉吉三年) 一六一番

八十一番 左

権少僧都宗我

またれつる月も軒ばにかたぶきて端居すしく更けぬこの  
夜は

〔判詞〕左歌、端居はふるき詞に侍れどもなほ俗にちかくきこえ  
侍り

『芳雲集』(武者小路実陰) 一六〇〇番

(夏鶏)

夏のよは端居のままに聞馴れてね覚忘るる鳥の声かな

⑧待宵・月―「菊」

『新古今和歌集』巻第五秋歌下、五〇七番

五十首歌たてまつりし時、菊籬月といへる心を

宮内卿

しもを待つ籬の菊のよひのまにおさまよふいろは山のはの

月

⑨更行鐘・別れの鶏・待宵・月―「狭衣」

『基佐集』一三九番

夜擣衣を、なかはらとしゆきといふ人よみ侍りける

小夜更けて霜夜のかねもさやけきにいづこにうつぞ麻のさ

衣

『広沢輯藻』（長孝）五三五番

百首の歌に、擣衣到暁

夜を寒み霜にしきりて鳴くとりも声打ちそふる賤がさ衣

⑩四種類の香のうちひとつ欠―きぬく

『新勅撰和歌集』卷第十三恋歌三、七九一番

後朝の心を

土御門内大臣

きぬぎぬになるともきかぬ鳥だにもあけゆくほどぞこゑも

をしまぬ

『続後撰和歌集』卷第十三恋歌三、八三〇番

（おなじ心（後朝恋心……筆者注。）を 参議為氏）

きぬぎぬのわかれしなくはうき物といはでぞ見まし左明の

月

『洞院撰政治家百首』一二四一番

（後朝恋五首）

三位範宗

きえかへりきぬぎぬしたふあかつきの涙すすむる鐘のおと

かな

『新明題和歌集』卷第五恋、三八三八番

（寄鳥恋）

意光

待つよはのうき鳥が音をたが中の枕にかこつ衣衣のそら

①の「夢驚」、②の「寢覚」は、香の名称と組み合わせる詠まれた例として勅撰集所載歌が見出される。③の「眺望」は、平安時代の末頃から見られるようになる「月前眺望」という結題からくる名目であろう。④の「名所」は、いささかわかりにくい。本稿では、「古寺鐘」の例を挙げたが、鐘の音を聞く名所をイメージしたと見た。⑤の「霜夜」は、「月」との組み合わせは多いが、さらに「鐘」とも組み合わせるとなると、この後伏見院

の歌が勅撰集中、唯一の例と見られる。⑥の「衣をかへす」については、香の名称と組み合わせられて詠まれた例ではないが、この表現の典型例として『古今集』の小町の歌を挙げておく。小町の恋歌の代表的な一首である。⑦の「端居」という語が歌に詠まれ始めるのは、右に挙げた嘉吉三年（一四四三年）『前撰政治家歌合』の頃のようなのである。判詞には、「なほ俗にちか」い詞とある。これ以降、「月」や「鶏」との組み合わせで詠まれた例が見える。⑧の「菊」は、古来、「月」との組み合わせで詠まれ、白菊と月光の白が重ねられることが多い。加えて「よひ（宵）」を詠み込んだ例が、右の宮内卿の歌である。⑨の「狭衣」では、「鐘」と「鶏」、それぞれともに詠まれた例を挙げた。室町期以降の例は指摘できるが、それ以前の歌には見出しにくいようである。⑩の「きぬく」については、個々の香の名称とともに詠まれた例を列挙した。とくに最後の『新明題和歌集』の例は、「待つよはのうき鳥が音」という表現が先の小侍従歌に近く、「衣衣」と合わせて、本組香との関連性が認められる。なお、『新明題和歌集』は、前述のとおり、長月香（楽巻一九）の素材ともなっている。

《楽巻一五》雲井香

【翻刻】

△（朱）雲井香

前関白太政大臣

和田原漕出て見れば久方の雲井にまかふ沖つしら浪

此哥にて組侍る也。

一 名乗紙にて聞くべし。

一 舟の香一包、波の香五包、雲の香一包、都合七包聞香とす。

皆炷終て包紙を開くべし。」樂二七オ

一 舟の香斗り外に拵へ試に出す。

一 波の香は聞捨にて、七炷皆聞終て、舟と波（つよ）と何炷目に出たるを聞分て出す。名乗紙認様は、

三炷目	雲
五炷目	舟

如此書て

出すなり

一 記録点は、雲の独聞三点、二人より二点、舟は独聞二点、「樂二モウ二人より一点充也。聞の下に名目を認る左のごとし。

舟雲共聞たるは

和田原と書

舟斗り聞たるは

漕出ると書

雲斗り聞たるは

久かたと書



舟雲共にはづれたるは 沖迷マヨヒと書

一 記録認様左の通也。』樂二八オ  
雲井香之記

〔表〕樂二八ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

舟	1		波	5
雲	1		波聞捨	
			7	

\* 本香には、「舟」の香一包と、「波」の香五包、「雲」の香一包の計七包を用いる。試香は「舟」の香のみ。七炷すべてを聞き終わった後、「波」の香を聞き捨てにし、「舟」の香と「雲」(底本「波」は誤り)の香とが何炷目に出たかを名乗紙に書く。

記録点は、「雲」の香では、独り聞きは三点、二人以上聞き当てれば二点である。また、「舟」の香は、独り聞き二点、二人以上では一点である。記録表の最下段には聞きの名目を記す。すなわち、「舟」「雲」の香とともに聞き当てた場合は「和田原」「舟」の香のみの場合は「漕出る」。「雲」の香のみでは「久かた」「舟」「雲」の香をとともに聞き違えた場合は「沖迷」と書く。

(2) 和歌作品との関わり

本組香が依拠している歌は、『百人一首』七六番に載る、藤原忠通の詠である。

法性寺入道関白太政大臣

わたのはらこぎいでてみれば久かたの雲井にまよおきつ  
しら浪

香の名称は「舟」「波」「雲」である。「波」の香を聞き捨てにするのは、漕ぎ出した舟からの眺望として、大海原の波ではなく、雲を見極めようとする趣向であろう。

なお、聞きの名目のうち、「沖迷」の「迷」には、「マヨヒ」と読み仮名が付してあるが、本書冒頭の和歌本文は「まかふ」とある。右の『百人一首』本文は「まよふ」であるが、『百人一首』諸本でも、本書と同じ「まかふ」になっている伝本もあり、本文が揺れている。

香道用語解説

ウ(う) 客香。十炷香札の裏などに記される、「客」の字のウ冠を表記したもの。組香中に「客香」が別にある場合は、「ウ香」として区別することもある。

皆(かい) すべての香を聞き当てること。

聞きの名目(ききのみょうもく) 組香の主題や出典に拠って、答  
えに用いるために指定されたことば。

客香(きゃくこう) 組香では普通、試香のない香。一般に、客香  
は地香に比べて目立った香を用いる。

香包(こうづつみ) 香を包む紙。

試香(こころみこう) 本香前の香席。本香に出される香の一部を  
あらかじめ聞いて香を覚えておく。「試み」とも。

地香(じこう・じのこう) 組香では普通、試香のある香。一般に、  
地香よりも客香の方に目立った香を用いる。試香のない組香の  
場合は、客香と指定された香以外を指す。

出香(しゅっこう) 本香の香席において、香元から香炉を回すこ  
と。特に志野流においては、最初の本香を回す時に、香元が「出  
香」と宣言し、連衆はそれを言い継ぐ。

炷(ちゅう) 香を炷く回数を数えるのに用いる接尾辞。本来の説  
みは「しゅ」。江戸中期より「ちゅう」が一般的になる。

同香(どうこう) 同じ香。

名乗紙(なのりがみ) 答えを記す紙。「手記録紙」ともいう。現在  
の御家流も同じ呼称。現在の志野流では「記紙」(きがみ)とい  
う。

独り聞き(ひとりきき) ひとりだけ香を聞き当てること。

別香(べっこう) 別の香。

星(ほし) 香を聞き違えた時に、香席の記録に記す記号。通常、右  
または左肩に「●」を付す。星の数で減点されることもある。

本香(ほんこう) 名を伏せて炷く香木。連衆はこれを聞いて答え  
を出す。「試香」に対する語。

#### 附記

本稿は、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベース  
の構築と日本文化の歴史的研究(同志社大学人文科学研究所第19  
期第4研究、二〇一六〜一八年度)における研究の一部である。





















月 日	名糸	名糸	名糸	名糸	名糸	本	聖井香記 二人と一息光也 関の事小名目ヲ穂ノ丸ノ 舟雲光関ノ 舟ノ関ノ 雲ノ関ノ 舟雲ノ関ノ 沖進ノ言 祀源徳極ノ通也
	波	波	雲	波	波	波	
	刺	波	波	雲	刺	雲	
	波	舟	波	舟	波	舟	
	波	雲	舟	舟	波	舟	
	波	波	波	波	波	波	
	波	波	波	波	波	波	
	久方	沖速	滑出	和留糸	久方	久方	

(楽・二八丁裏)

(楽・二八丁表)

